

## 〔東京桑野会〕

### 朝河貫一と

### 覇権なきアジア外交

浅川 章

(七十六期)

はじめに

1972年9月、田中角栄首相が北京を訪問し、日本と中国が国交を正常化してから50年が経った。半世紀前のキーワードは、日中友好。中国は日中戦争で疲弊した国の復興途上であって、文化大革命の混乱の渦中にあつた。

日本は戦争で多大な損害を与えたとの認識に立って、資金・企画・技術等、強力な支援を進めて、復興とその後の中国の改革開放路線を後押しした。

この半世紀の間に冷戦は終結し、ソ連に代わり中国が台頭し経済成長著しく、21世紀に入り世界第2位の経済規模となり、強大な軍事力も手にした。現在、3期目に入った習近平政権は「中華民族の偉大な復興」を唱え、米国との覇権をめぐる対立が世界を揺さぶっている。

中国の経済規模は2010年に日本を追い越

し、今や日本の4倍近くに膨らんだ。国交正常化当時の蜜月時代は遥か過ぎ去り、尖閣諸島、歴史認識等をめぐり摩擦は絶えず、日中関係は国交正常化以降、最も厳しい状況にある。今後の日中関係はどうなるのか。日本はこの巨大な隣国といかに向き合うべきか。この機に改めて考えたい。

#### 百年前の忠告

第1次世界大戦の最中の1915年1月、日本は中華民国大統領袁世凱に対して対華21カ条要求を突きつけ、同年5月、中国側にこれを受諾させた。内容は、山東半島や満蒙内の日本の独占的な特権を大幅に拡大するもので、日本は最後通牒を発して要求の大部分を認めさせた。中国国内では、これに反発して排日運動が高まっていた。

これに関して、当時エール大学助教教授であった朝河貫一は対中国、対米関係の今後を憂慮して、時の首相大隈重信に長文の手紙を書いた。大隈と朝河は東京専門学校以来の旧知の間柄であった。日本は明治40年代以降、大陸進出を進めていて、その独善的な外交に批判を加えていた朝河は、「日本の将来の一大事は支那に関する日米の相互感情如何に在り」とする観点に立つて、「日本の覇権なきアジア外交の基本精神」

を諄諄と説いた。

朝河はあるべき日中外交の基本路線として次の三原則を提唱した。

第1は 日中の共利共進

第2は 東洋の自由

第3は 東西世界の協調

である。

第1に、日本と中国は歴史上・政治上共同の命脈を保ってきたのであるから、日中は対等の立場で互いに発展を助けあい共進しなければならない。

第2に、日本と中国は並行した関係を保ちながら競争的な友好関係に立たねばならない。そうあることによって、はじめて中国は西洋の束縛から脱し、独立主権を確立することが出来るのであり、そこに自由東洋が実現するのである。

第3に、日中が共進し、東洋に自由が訪れたとき、はじめて東西世界が互いに刺激しあつて協調が進む。

要するに朝河は、日米関係の将来の最も重要な問題は必ずや中国関係をめぐって生起するであろうことを予見していたため、将来にわたる中国問題の根本的な解決策として三原則を提唱したのである。こうして朝河は、「将来の大利の為に目前の小利を捨てよ」、「覇権なきアジア

外交を旨としたこの方針こそ日本は世界に対して大胆に明言すべき」と大隈に力説したのである。

その後の推移をみると朝河のこの三原則には、提示から26年後における日米戦争への重大な岐路を予断するものがあつた。のみならず今日において、アジア太平洋における覇権をめぐる対立する中国と米国をも戒める普遍的価値ある提言といえよう。

#### 日中関係の過去現在未来

現在、政治・外交・安全保障上、日中関係は過去50年で最も厳しい状況にあると言われている。しかし、国と国との関係は政治的になつたがりだけではない。日本と中国との間には経済や貿易、文化面など2000年にも渡る交流の歩みがあり、日本国家の黎明期には漢字や貨幣、仏教などの伝来、律令国家の法制の導入、室町・江戸期の漢籍や絵画の輸入など現代に至るまで脈々と続いている。

近代に入つては、アジアで先行して近代化を成し遂げた日本に亡命または留学して中国革命を推進した孫文をはじめ、革命や近代化に貢献した周恩来や魯迅、郭沫若など広大な人的交流がある。翻つて両国が敵対して干戈を交えたのは白村江の戦い、元寇、文禄・慶長の役、日清

戦争、日中戦争があげられるが、底流に友好的な善隣関係史がベースにあつたのは論を待たない。元来、同じ儒教圏、漢字文化圏であつて倫理観や美意識、食文化も共通するところが多く、文化的な同質性は高いものがある。例えば、貿易分野では国交正常化以降、両国の通商関係は年々発展し、日本にとつて中国は2007年以降最大の貿易相手となつている。

朝河博士が日中両国は共同命脈と評したように地政学的にも歴史的にも関係が強く、互いに向き合わざるを得ない隣国であることは変わらなず、安定した関係を築く切実さはむしろ増大している。半世紀、否一世紀先を見通して、双方は一時的な対抗心や感情に流されず、対話と交流のパイプを太くして、対等・互恵の理念に立つて善隣協調関係を維持発展すべきであろう。

(参考文献 阿部善雄『最後の「日本人」朝河貫一の生涯』)

